

# 映画前史の映像資料—写し絵と幻燈

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館では、今年度より「《映像》常設展」が新設される運びとなった。九月から博物館三階で開催されている常設展の第二弾では、映画の黎明からテレビの隆盛、そして現在の映像文化までを一望することができる。この展示の冒頭に置かれているのが、「写し絵」と「幻燈」に関する資料である。

幻燈機（マジック・ランタン）は、映画以前に存在した映像の投影装置である。スライドに描かれた絵や写真をレンズによって拡大し、ランプやガス灯、後には電燈の光によってスクリーンに投影した。一七世紀頃に西欧で発明され、貿易やキリスト教の伝道に伴い一八世紀には日本に伝来している。このとき伝来したマジック・ランタンが寄席の演目に取り入れられることで誕生したのが、「写し絵」である。

写し絵は、「風呂」と呼ばれる木製の投影装置（写真1）を複数の写し手が巧みに操ることで、スクリーンに変幻自在の映像を映し出す独特の映像文化であった。彩色されたスライド（種板）の変化と、語り、音曲が組み合わされることで、三番叟や達磨の滑稽譚、あるいは勧進帳や四谷怪談といった物語が演じられた。

江戸時代に寄席の演目に取り入れられ、人気を集めたマジック・ランタンは、明治期になると一転して教育用具として用いられるように

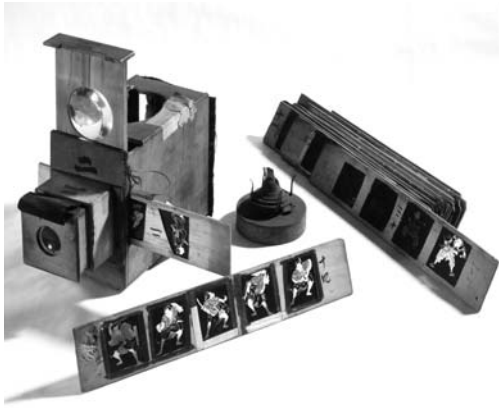


写真1



写真2

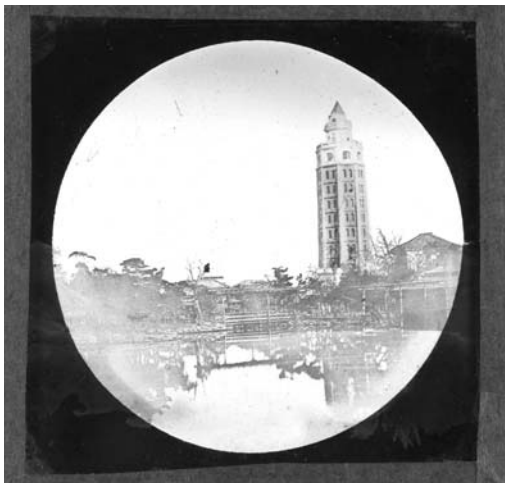


写真3

なる。文部省により再輸入されたマジック・ランタンは、今度は「幻燈」と呼ばれ、授業用の映像提示装置として各地の学校への貸出が推進されていく。民間業者が廉価な機器の販売を始める明治二〇年代には、ほとんどの小学校に幻燈機が行き渡ることになった。一方、教育の外側においても、古くから語り継がれる物語のスライドが時に啓蒙的、時に滑稽な語りとともに人気を集め、磐梯山噴火や日清戦争、日露戦争の際には、映像と語りによって現場の状況を伝えるなど、先駆的な報道の役割も果たした。また各地の土産物や子どもの玩具として流通したスライドには、当時の風俗や風景の面影が数多くとどめられている（写真2、3）。「幻燈熱」とも呼ばれたその流行の様子は、明治時代に幼少期を過ごした作家たち、たとえば宮沢賢治の「雪渡り」、江戸川乱歩「旅順海戦館」、小山内薫「第一課」、芥川龍之介「少年」といった作品のなかにも記録されており、後に伝来した映画の日本における急速な流通を準備していたことをうかがわせる。

写し絵や幻燈に関連する資料は、映画以前に存在した日本の映像文化の実態を明らかにする、きわめて貴重な証言であるといえるだろう。演劇博物館では、現在、こうした映画前史に関わる資料のデジタル化と公開に向けた作業を進めている。